東哲セミナー

新宗教

その直面する問題

ブライアン・R・ウィルソン
粟津賢太 訳

一　はじめに

ここ数十年、世界の多くの地域で、新宗教の繁栄を一般大衆はますます意識するようになってきた。こうした高い関心は、単に多くの社会で宗教的な逸脱運動が実際に増えていることによるものではない（確かに増えているのではあるが）。それは世界的規模で諸条件が変化し、物の考え方やイデオロギーの伝達に影響を与えていることの結果であり、移民や、メディアによる関心、そしてその他の様々な要因の帰結でもある。しかしながら、新宗教それ自体を何らかの意味で新しい現象であると考えることは誤りであろう。実のところ、宗教が変化の過程になく、信仰、実践、組織の伝統的な在り方が、新しい運動の挑戦にさらされなかった時代は歴史的にほとんど記録されていない。西洋では、少なくとも過去千年間、新宗教といえばより古くすでに確立されていた宗教からセクトとして分離したものであった。そのようなセクトは、ほとんど常に周囲の人々からの敵意の対象であった。彼らの持つ不寛容な傾向は、時には支配的な宗教の聖職者たちや政治的当局者たちによって鼓舞されていた

のである。

新しい宗教組織にとって、差別され、そしてしばしば迫害されることはよくある経験であった。十七世紀のイングランドではクェーカー教徒たちが迫害を被り、非常にしばしば彼らの信仰ゆえに投獄された。メソジスト派は、時々地域の国教会の聖職者や地方行政官の支援を得た暴徒に襲われ、いくつかのチャペルは焼き落とされた。救世軍（the Salvation Army）はいつも野外集会で嫌がらせを受けていた。すなわち、一八八二年には、年間に六六九名の救世軍信者たちが暴漢の攻撃に晒され、一方、公式の差別としては、一八八四年に「往来妨害」という疑わしい罪によって六〇〇名ほどの救世軍の「戦士たち」が投獄されている。[1]

アメリカ合衆国は、信教の自由に関する権利を擁護することに国家建設の当初から関わってきた国であるが、ここでも状況はほとんど変らない。初期のモルモン教徒たちは追い回され攻撃され、十九世紀を通して、彼らが封建的な権威との暴力的な小競り合いに関わっていたことが様々なエピソードとして自覚されている。一九三三年から一九五一年までの間には、一万八千人以上のエホヴァの証人の信徒たちが逮捕され、とりわけ第二次世界大戦中には頻繁に暴徒の攻撃に晒されていた。[2] ヨーロッパの多くの国々で、スウェーデンのような一般的にリベラルで寛容な政策をもつ国でさえも、いずれのセクトも、あまり良い扱いは受けてこなかった。一方、カトリックと正教の支配的な国々では、一般的な敵意と公式の差別は目に見える形でしばしば現在までも続いており、国連やヨーロッパ会議やヘルシンキ合意から提案された宗教的寛容を勧める解決策にもかかわらずに存在しているのである。

二　異国起源を持つ新宗教

これらの古いセクトはその当時の「新宗教」だったのであり、現代の新宗教が被っているものは前の時代の宗教的な不寛容と明確な連続性がある。今日的な状況との違いは、多くの新宗教が、それらの発生した社会における、定着し、確立された諸宗教との分業からまったくかけ離れていることである。新宗教の多くはきわめて異国的な起源を持つものである。それゆえまったく異質に見え、おそらくその地域の支配的な宗教伝統にのっとった信仰に対して、より脅威的であるように見えるのである。古いセクトは異端として破門されており、それさえなければ土着の信仰への熱心でまじめな信奉者であった人々を欺くものとみなされていたのに対し、新宗教は、ある社会に受け入れられている宗教的前提に対してより根底的に挑戦するような他文化からの輸入品であるとみなされている。そのような新しい運動は、非常に異なった崇拝のパターン、福音主義、勧誘方法、そうした運動のいくつかが従事している公衆の面前での活動などのゆえに、ただちに目につくようになり、また、すでに存在する社会的秩序のパターンを混乱させる可能性があるものと見なされるのである。これらの特徴が、新聞を売るため、また目新しさによってのみ得られる刺激を紙面に維持するためにセンセーションを求めているメディアを刺激し、新しい運動の危険性と規模を過大視させ、自らの活動と意図に対する偏った理解を行き渡らせてしまうのである。

現代社会の中で行われている新しい運動の規模と逸脱性が、一般大衆そしてジャーナリストたちさえをも混乱させるものだということは理解できる。彼等は直接的な知識をほとんど持っておらず、実際はまったく別の教団が行なったことを他の新宗教教団のせいにすることも珍しいことではない。疑いもなく新宗教の中には発達した信念体系を持ち、より重要なことには、より広い社会の人々のなかで警戒され、非難されるべきであると広くみなされているような実践をしているものもある。

非難されるべきこうした実践や戦略には、若者や未成年者までをも潜在的な勧誘の標的とすることがあった。勧誘の目的のために、大学の学生や、「バックパッカー」のような外国を旅して回る若者たちに布教の的を絞ってきた運動もある。学術的な研究に専念することは時間の浪費であり、その運動の宗教的な目標に対して時間、エネルギー、そして、いくつかの事例においては金銭までもささげる活動に従事することのほうがより良いことであると、学生にそそのかすような組織に対する懸念を、大学は表明してきたのである。キリスト中央教会（The

Central Church of Christ）のようなセクトは、大学の中でとりわけ活動的であったし、一方、統一教会（the Unification Church）やクリシュナ意識協会（the Krishna Consciousness）への初期の改宗者は、空港やバス・ステーションでつかまえられた人々であった。他のいくぶん異なる勧誘テクニックは、「神の子供たち（The Children of God）」（後の「愛の家族（The Family of Love）」）が話題になった時代までに発展した。この運動の信者の女性たちは、しばしば大都会のバーなどで孤独な男性を見つけ、彼女たちの女性の魅力と性的冒険の見込みを男性たちの興味を惹くために使うことを教えられ、その運動への勧誘に成功していたのである。この特定の実践が間違いであったと否定された後でさえも、愛の家族は彼らの共同体に住むメンバーたちの間での乱交を認め続けている。改宗における財政的な面に関する問題は、サイエントロジー教会（the Church of Scientology）の事例では中心的なものであった。一般大衆の非難は、教会によって組織された研修コースに対する莫大な料金に対して向けられ、メディアと裁判所の両者は、その運動の療法的実践に対して断続的に告発を行ってきた。

これらの例や似たような事例は新宗教に対する敵意を部分的に正当化しているのであるが、こうした実践のどれもが、すべての新宗教の奏でるレパートリーの一部であろうとみなす批判が安易に受け入れられることは、それほど簡単には正当化できない。さまざまな宗教運動がほとんど同時的に発生した理由、こうした運動の多くが（西洋のキリスト教的な観点からみるならば）「異国のもの」であると安易に定義されている理由、そしてこれらの運動が人口構成上の似通った集団（多くの場合若者）に彼らの注意を向けていることなどを説明はするだろうが、近年の新宗教があまりにもしばしば直面してきた社会全体を覆うような非難や無差別な敵意を正当化はしないのである。

新宗教はそれが新しいという理由によって敵意をもって扱われているのである。こうした運動に対する敵意に首尾一貫した根拠がないことは、メンバーたちに一般的な社会生活に参加するように奨励していることで告発される、つまり主要な制度に「浸透」を狙っているとして

攻撃されている運動があること（こうした非難はドイツにおけるサイエントロジー教会や、フランスにおける創価学会インタナショナルに向けられてきた）、またその一方で、社会から逃れ、隔離された共同的な生活様式を信奉者に説いているといって非難されている運動もあること（こうした批判はしばしば統一教会に対して行われてきた）を思い起こせばただちに明らかとなる。ラジニーシ運動（the Rajneesh movement）は快楽主義的なライフ・スタイルを正当化するものとして攻撃されてきたし、反対に、統一教会は、信者の自由、とりわけ性的な自由を不当に制限するような、行動の厳格な禁欲的在り方を受け入れるように若者たちに説いていることで、ジャーナリスティックな非難の対象となってきたのである。

新宗教運動における多種多様な実践の形態は、新宗教が詐欺的行為や洗脳によって新しい信者を獲得しているという、より一般的な非難となってきた。詐欺的行為であるとする非難は、これらの組織が真の意味では宗教的なものではなく、念入りに作られた財政的機関や恐らくは他の搾取形態を巧みに操作しているということを含意している。洗脳という根拠のない非難は、不正確な表現が誤用されたものではあるが、それまでは「ノーマル」であった子供たちの奇妙で異国的な宗教への突然の回心を、取り乱した親たちに説明するのに不可欠なものとして主張されている。実のところ、「洗脳」とは朝鮮戦争におけるアメリカ人囚人に対する半強制的かつ半誘惑的な扱い方を記述するために創案された用語であり、宗教運動の事例に適用するのには不適切である。仮に彼らの「改宗者」を監禁することができたとしても、「最初は恐怖、次に買収」という朝鮮人看守たちの使ったテクニックに相当するものは見つからない。宗教運動は規範的服従によるものであり、監獄において特徴的な強制的服従に頼っているのではない[3]。

新宗教には説得に関する非常にさまざまな戦略があるが、また同時に、彼らが攻撃されているテクニックのいくつかは単にフィクションであるということを調査は明らかにしている。しかしながら、根本的に異なっているにもかかわらず、ある運動にみられる属性や実践形態を、他の運動へ安易に転嫁させる大きな影響力が大衆メ

ディアにはある。すなわち、ある新宗教がなんらかの操作方法を使用しているならば、このことはすべての新宗教運動に当てはまることであるとあまりにも安易に想定されてしまう。新宗教は、あたかもすべてが同じものであるかのように「ひと括りにされ」てしまうのである。

三　マス・メディアにおける新宗教報道

新宗教の属性に対するこうした不当な一般化は別としても、いくつかの新宗教の経歴に見られるドラマチックなエピソードが、新しい信仰に対する今日的な評判に影響を与えてきたということもまた明らかである。一九七〇年代後半以来、広く報告されたいくつかの出来事が新宗教の評判を落としてきた。一九七八年には、カリフォルニアから、ガイアナのジョーンズタウンへ移民した後の人民寺院（People's Temple）の信者たちによる大量自殺があった。一九九三年にはテキサス州ウェコで、FBIとブランチ・デヴィディアン派のメンバーとの悲惨な銃撃戦が起こった。そのわずか一ヶ月後、自殺にしろ殺人にしろ、太陽寺院の（Solar Temple）メンバーの悲劇的な死があり、スイス、カナダ、フランスで一九九四年から一九九五年の間に引き続いた。一九九六年、東京の地下鉄の乗客を襲ったサリン・ガス攻撃は、オウム真理教の信者たちによって行われた。いわゆる「天国の門（Heaven's Gate）」派の信奉者たちは世界の破局を見越して一九九七年に集団自殺をした。

これらの出来事は相互に全く無関係であった。これらはそれぞれ根底的に別のものであったのである。こうした事件のすべてが新宗教によって行われたのではない。例えば、人民寺院は、ディサイプル派教会によって任命された牧師の下での会衆であり、アメリカで人気を集めた一宗派であった。その牧師は主に政治的に動機付けられており、また、信徒たちを、確立された権威への極左勢力からの挑戦に対する前衛部隊とみなしていた。ウェコにおけるエピソードは、宗教的に動機付けられた自己犠牲というよりも、あきらかにFBIのまずい戦術に刺激された過剰反応であった。[4] しかしながら、一連の惨劇の結末は、誤った連想が転嫁されることによって、明らかに、多くの全く無関係な新宗教団体への疑惑となってきたのである。

ここ数十年のうちに発展してきた新宗教に対する固定観念（ステレオタイプ）は、マス・メディアによって生み出されてきたものである。ジャーナリストたちは宗教的スキャンダルをきわめて多くの発行部数を生み出すものと考えてきた。ジャーナリストたちは必ずしも彼らの扱う情報源や証拠などの点で慎重であるわけではない。宗教的センセーションは新聞の売上げを伸ばすし、また競争の圧力があるからである。彼らは往々にしてある宗教運動と他のものを取り違えがちであり、また宗教的指導者は二枚舌であり信者を操っているという既成のイメージを作り出している。これらのジャーナリストたちのほとんどは、宗教的な出来事に関する専門家には程遠く、独自の直接的な調査をしようとするものはほとんどいない。つまり、彼らの情報源は、往々にして、過去に発行された、ジャーナリストによる新聞記事だけなのである。こうして、以前に出版された誤りを彼らは犯し続けているのである。

とりわけ、社会学者たちに「出来事の否定的な概括（negative summary events）」（また、「累積的な軽蔑的ステレオタイプ」と考えることがより適切であるかもしれないが）として知られる二番煎じの報道がごく普通に行われている。これはニュース・ストーリーで使用される、問題となった運動に関する過去の記事の要点を繰り返すやり方であり、過去のエピソードにおけるその運動の顕著な特質の概要を思い出させるものである。新聞は、特定の運動に対する新しいストーリーを同じ種類のものとして位置付けながら、以前のセンセーショナルな評価を繰り返すのである。こうしたやり方は、「ある状況や出来事に関するジャーナリスティックな記述とその否定的な本質が、時々に明るみに出るゆっくりと進行するひとつのストーリーの一部であるかのように取り上げて表現する」ものである。「それゆえ、明らかに個別的な事件が、もっと大きな、のぞましくない現象の一部であると大衆に思わせつづけるために利用されている」のである。[5] かくして、こうした概括は「さて、昨年シンガポールから国外追放されたエホヴァの証人ですが、昨日また…」という出だしで始まる。

こうした報道方法の効果は、単に新しいストーリーをより広い文脈に位置付けるだけではなく、過去におけるネガティヴな出来事のみを呼び起こすことによって、その運動に対する否定的なイメージを強化している。他にも宗教とは全く関係ない事件の場合でさえ、ある新宗教教団の信者個人に焦点を当てる傾向が報道にはある。仮にある人間が罪を犯したことが発覚すると、その者が新宗教に属しているという事実がほとんど確実に報道のなかで触れられる。あたかもその犯罪と宗教的な帰属に、何らかの関係があるとでもいうかのように。いうまでもなく、もしも彼が主要なキリスト教宗派に属している場合には、そのような特定が行われることはない。彼が宗教的な少数派に属していることは、単にネガティヴなステレオタイプを強化するために引き合いに出されているのである。

メディアの果たす役割と、その新宗教に対する差別的な扱いが珍しくないことを考えるならば、一般大衆が新宗教を「ひと括りにする」傾向をもつのは驚くにあたらない。新宗教はみな異国のものである。新宗教は信念、実践、そして恐らくはライフ・スタイルの点で、社会的な規範とみなされているものから逸脱している。しかし、新宗教のせいで伝統的規範と価値が破壊されて行くと、あまりにも安易に考えられている。新宗教を目立たせる特徴や、あるいは注目を集める事件が常にあるので、新宗教は伝統的な文化と調和しておらず、社会的、文化的、恐らくは政治的にも破壊的な分子であるとする非難が、安易に議論されるのである。こうして、フランスのジャーナリストたちは、日本に起源があることと、多数の日本人メンバーがフランスにいることに注目して、創価学会インタナショナルが国防施設への侵入を狙っていたなどという根拠のない話を作り上げたのである。このでっち上げの犯人たちは裁判所によって撤回を命ぜられたが、その間に、彼らは新聞の売上を伸ばす「センセーション」を作り上げてしまっていたのである。

四　反カルト運動

もちろん、ニュース・メディアだけが新宗教に対する問題を提起しているわけではない。新しい信仰へ改宗することそれ自体が社会問題となりうることを新宗教は予想しなければなるまい。このことは、とりわけ高度に個人化された近代社会の場合にあてはまる。過去数世紀において、王国全体、地方共同体全体、部族全体、近隣全体、あるいは家族全体が同時に改宗するというように、(必ずしも改宗が心の底からのものではなかったにせよ) 改宗とはしばしば集団的なものであったのに対し、今日の新宗教への改宗は個人によって一人で行われるものである。ひとたび改宗が起こると、家族は心配し、問題となった新しい信仰が、社会と全くかけ離れている場合にはなおさらである。(十八世紀のアメリカ合衆国や二十世紀初期のウェールズで起こったような、改革運動や再興運動の影響などの) 過去数世紀において時々起こった一時的な、あるいは慣習的な改宗とは異なり、現代の新宗教への改宗は、難解で、高い費用がかかり、なんらかの変形された生活習慣を受け入れることを意味する傾向がある。こうした改宗には、——これらのケースが恐らく敵対的な反応を招いてきたのであろうが——新しい信仰へ完全に専心するために、それまでの生活スタイル、職業、家族、教育を放棄することを個人に要求するものもある。他の新宗教の中でも、統一教会、ディヴァイン・ライト・ミッション、クリシュナ意識協会、ラジニーシ運動などへ改宗した若者たちの場合や、サイエントロジー教会の中核的な組織幹部となった者たちの場合がこうした事例であった。

過去において、新しい運動は反対する活動的な組織の形成を招くこともあった。すなわち、十八世紀におけるメソジスト派や十九世紀の救世軍は、いずれもまさしくそうした組織だった抵抗に直面したのである。今日、新しい運動は、いわゆる「反カルト運動」という制度化された敵意に直面していることを自覚してきた。これらの団体は、子供の改宗に心を痛める親が、同じような境遇にある他の親たちと出会い、社会的な関心を高めるため、そして彼らが「カルト」と名づけたものを抑制する政治的な行動を要求するため団結したことに始まっている。この種の団体は、主要な西洋諸国のほとんどに発生し、伝統的な教会聖職者たちからのなんらかの支援を得ている (とりわけドイツでは、主な教会は聖職者の中から指

名して、職業的な「カルト問題の専門家」を持っている)。反カルトに関する職業的な「専門家」の小集団は、イギリスとアメリカ合衆国でも発生し、多くの「カルト」が改宗者として若者たちを捕らえるために使ったとされる、根拠もなく主張された洗脳テクニックの効果を無効にする専門家であると主張する者、いわゆる「デプログラマー」を生み出してきた。

デプログラミング(脱洗脳)と、しばしばそれに伴う誘拐テクニックは、アメリカとイギリスにおいて、現在では違法行為であると宣言されており、デプログラマーたちには懲役刑の判決を受けている者もいる。これら両国における反カルト団体は、ここ数年の間にその影響力のほとんどを失ってきており、合衆国における指導的な機関は破産してしまっている(破産後、あるグループが信教の自由と寛容に貢献するためにその所有権を獲得し、「カルト警戒ネットワーク」という同じ名称の下に、情報収集、調停、調査のための中立的な機関が設立された)。それにもかかわらず、その最盛期において反カルト機関が作り出し、強化した、新宗教に対する敵意という社会的風土は依然として残っている。とりわけ、宗教、家族、そして国民文化という伝統的な価値を再主張しようという関心から、カルトに対する懸念を激烈に表現するような相当数の政治家たちを、特にヨーロッパ大陸において、反カルト団体は論争に引き入れたのである。

こうして、(プロテスタント諸国に比べて伝統的に宗教的には不寛容であった)カトリックの伝統の強い国々において、新宗教を統制するために何かがなされなければならないという要求が政治家たちによって主張されてきたのである(いくつかの国では、カトリック系の政治家たちからのこうした呼びかけは伝統的には敵対する——反僧職的、自由思考、そして時にはフリー・メーソンなどの——いかなる宗教的な影響も削減しようとする政党からの非難によって強化されてきたのである)。これらの利益集団の執拗な働きかけによって、フランスとベルギーの両国では新宗教に関する報告書が作成され、また、敵意のこもった解決法がヨーロッパ議会へ議題提出された。それらのレポートは、たとえ客観的で事実に基づいていると主張するものであったとしても、作成者たちの先入観をすこしも覆い隠せてはいない。あるいは、彼らが認めぬ運動を管理し禁止するための方法さえ主張することに、彼らの明確な目的があることを、すこしも覆い隠せてはいない。フランス会議へ提出した報告書を作成した政治家たちは、いくつかの(少数の)運動の特徴をすべてに対して真実であるとみなすことで、報道機関と同様に新宗教を差別的にひと括りにしたのである。

新宗教が直面している少なからぬ問題は、本質的に敵意のこもった公式報告の作成者たちが、その目的をセクトに対する戦いであると表明している時でさえ、自分たちの絶対的な客観性をしきりに確信していることである。こうした論理的矛盾の引用しうる例は沢山あるが、中でもフランス議会に提出された報告の作成者たちは、「以上に加えて、セクトとの論争に効果的かつ公平に戦うためには、この現象を良く知ることが必要であると考えられる」(一〇二頁)と語っている。国家が支持すべきであると示唆されてもいる反カルト運動こそが、こうした情報の供給に重要な役割を持っていることを宣言した後で、彼らは「この情報が完全に客観的であるべきだということはもっとも大事なことである」(一〇八頁)と主張している。しかし、追求すべき目的ははっきりしており、「セクトが巻き起こしうる危険に関する」(一〇七頁)情報が必要だとされているのである。[6]

五　背教者の心理学

反カルト運動が描き出し、そしてメディアや政治的な権威に与えている証拠とは、そのほとんどが元信者によってなされた新宗教教団の活動や内部機構についての評価に基づいている。背教者(apostates)とは、いつの時代においても宗教教団にとり明白な問題であり、トラブルの源であるが、とりわけ、現代の新宗教にとってそうであった。元信者たちには、新宗教への入信をあきらめるように説得されてきた若者たちもいる。こうした説得は、共同体的な生活様式を実践し、あるいはメンバーを隔離された場所へ引き入れるような新宗教の場合には、しばしば誘拐という手段にまで訴えるデプログラマーたちの活動によって達成されてきたものがすくなくない。しかし、物理的な誘拐が必要なかった場合でさえも、信

者が経験したはずであると根拠もなく想定された洗脳を無効にするものと考えられている、デプログラミングを受けることが必要であるとされている。

デプログラミングされた元信者は、今や背教者であり、第一に彼（あるいは彼女）が新宗教を支持したことに対して、次にそれを放棄しようとしていることに対して、そしてしばしばその両方が混ざり合った正当化の必要に迫られている。彼は、まず自らの両親、血縁者、友人たちを新しい信仰に入るために見捨て、次に心からその信仰に専心して新しい友人を作り、そして今度は、家族の元へ復帰させられるため、結果的にこれらの新しい仲間の信者たちへ背を向けてしまったのである。それゆえ、自尊心や他人から受ける尊敬を損じないために、彼の行為には特別な説明が必要とされているのである。

ここ数十年の間で、信者の忠誠を強力に要求するような新宗教が非常に多く発生したことを考えるならば、背教者の事例はマス・メディアの相当な注意をひきつける事態となっていると思われる。通常、自分のことを犠牲者であると表現する背教者たちの語る話は、とりわけ、彼らがそれまで所属していた運動の「暴露的な」話や秘密を提供する場合に、新聞の売上を伸ばす有益なものとみなされている。特に、自分たちの傷つきやすさと、勧誘された運動の指導者やメンバーによって行われる心理操作、詐欺、あるいは強制という二つの点について彼らの以前の信仰を表現することができる場合に、背教者たちは不必要に大きな注目をメディアから受ける。これらの内容が、大抵の場合、一般大衆が通常手にすることのできる少数宗教に関する唯一の情報なのであり、またもっとも広く流布されている情報であることは確実である。背教者たちは、これらの運動を警戒する一般大衆の意見（あるいは誤解）を形成する中心人物となっている。こうして、背教者たちの存在は、新宗教にとって大きな問題となっているのである。

こうした研究分野で調査をする、宗教的少数集団に関心を持つ学術的な研究者たち、そしてとりわけ社会学者たちは、通常は、よく認識されたさまざまな方法による学術調査を企てるものであるが、背教者たちによって提供されたデータについては、これを慎重に取り扱う。研

究者たちは、公文書の調査と印刷物や書類の研究だけではなく、参与観察、インタビュー、調査紙法調査、ここで最も直接的な問題である、情報提供者からの情報などからもデータを集めるのである。背教者たちはしばしば情報提供者に非常になりたがっており、おそらく、なりたがり過ぎである。私はかつて別稿に次のように記した。

「たまたま遭遇しただけであり、彼らが語ろうとすることに対して個人的な動機を持っていない情報提供者の方が、目的を持ち、調査者を利用しようとしている情報提供者よりも望ましい。背教者たちは、一般的に自己正当化の必要に迫られている。背教者は自らの過去を再構成し、前の宗教に所属していたことを弁解し、以前の親しかった仲間たちを非難しようとしている。背教者たちは、彼らが心理操作、策略、強制、または詐欺によって、現在では脱退し非難している組織へ加入しあるいは内部へとどまるようにいかに説得されたかを説明するために、『残虐な話』を物語る稽古を積んでいるということは珍しくない。センセーショナルに報道された背教者たちは、しばしば、新聞に売られ、あるいは（多くの場合、いわゆるゴーストライターによって書かれた）書籍となった物語という形で、自分の体験した内容から利益を得ようとしているのである。[7]」

こうして、宗教的な少数集団を研究する社会学者たちや調査者たちは、背教者たちの独特な心理状態をよく知るようになった。それが彼らに、自分が以前に関わっていたが後になって否定した宗教に対する相対的な立場をとるように動機付けている。背教者は、まず教団への入信とそれに引き続く信仰の放棄との両方について、自分が信用できる人間であることを主張する必要に迫られているのである。自分の変節を正当化するためには、以前の信念を（通常は突然に）持つにいったことと、それにもかかわらず突然にそれを捨てて非難するようになったことの両方に関する信憑性のある説明が必要なのである。学術研究者たちは、いわゆる「残虐な話」を物語ることが背教者に顕著な類型であることを認めるにいたっており、顕著な現象であるとみなすようにさえなっている。[8]

背教者は、彼が以前の信仰に勧誘された時の自分自身を、鬱状態、孤立、社会的または経済的なサポートの欠如、家族からの疎外、あるいはその他の似たような環境などの、特に傷つきやすい過敏な状態、にあったと表現するのが典型的である。彼のかつての信者仲間たちは、今では、虚言、詐欺、愛の約束、支援、期待を高めること、幸福の増大、あるいはその他似たようなものによって、彼を説き伏せてきたものと描き出される。実際、背教者はさらに、以前の信者仲間たちは虚偽の友人であり、彼の良心を搾取し、長時間にわたる無報酬の労働や、金や財産を搾り取ろうとだけしていたと物語っている。このように、背教者は自分のことを「救出された者」であり、入信時の過去に行った自分の行為に責任はなく、そして、教団から去ったことで「正気を取り戻した」と語るのである。彼ら――今では彼が捨て去った新宗教のメンバーたち――に責任のすべてはある。彼らは、計画性のある悪意を持って、疑いを知らない無実の犠牲者に無理強いをしたということになる。事件のそんな表現によって、背教者は過去の行為の責任を転嫁し、恐らくは後になって自分で捨て去った宗教集団に反対するためより広い社会に影響を与えて、これを利用し、再び社会の一員となろうとしているのである。

六　制度化された敵意

教義や実践の点から、また信念や組織形態が新しく、あるいは最近取り入れられたという点からも相対的に異質といえる新しい運動は、一般大衆の疑惑を非常に受けやすい。もしもこうした運動が秘密や秘義を持っていたならば、あるいは明らかに改宗者の獲得に非常に熱心であるならば、あるいは、共同体の特定の層（例えば、若者、学生、少数民族集団、移民など）へ独自のやり方で訴えかけるものであったならば、またあるいは信者に一般大衆の常識では考えられないほどの利益を約束するものであったならば、これらの運動は容易に一般大衆の非難や敵意の的にさえなるであろう。とりわけ、センセーショナルな報道によって拡大された背教者による残虐な話は、さらなる残虐な話のニュース価値を高め、この傾向をあおっている。こうした方法によって、個々の背教者

たちの話が重要なものとして受け入れられていることは、学術的な社会学者がこの種の宗教現象を調査する場合の客観性や倫理的な中立性を損なうまでになっている。

新宗教の直面するであろう問題の多くは、伝統的な諸宗教がかつて到達したことがないほどに、新宗教が今日的な社会的条件にうまく適応していることをはっきりと示すものである。これらの運動は、神聖視されている昔ながらの方式や因習によって妨げられない在り方を選ぶことがある。これらの運動は運営上の多くの点で合理的な技術と手続きを受け入れることがあり、これらは、望ましく典型的な宗教団体のものと考えられている伝統的な信仰によって受け継がれてきたやり方とは、ほとんど確実に異なっているだろう。

ある新宗教団体が、教義の出版や資金調達の手続きの上で近代的な方法を採用することもあるだろう。そのスタイルは、素人的で神聖な慣習によって正当化されたものというよりも、むしろビジネスライクで職業的なものだろう。伝統的な宗教では、金銭を供犠の一形態と考え、荘厳な儀礼的な手続きによって集められる。それは、集金行為を、単なる金集めという下品なイメージとはかけはなれたものとする象徴によって満たされている。一方、近代的な運動は、商品に対する支払いにより近いやり方で寄付を募るような、厳格に合理的なやり方をとるであろう。そのような手続きを採り入れた結果として、新宗教は、少なくとも何らかの点で、むしろ世俗的にみえるであろう。これらの運動は、宗教的な行いという人々の心の中にあるモデルにそぐわないものであり、それゆえ、信仰よりも金に関心を持っていると、安易に考えられてしまうであろう。

そのような印象が、新宗教教団の主張をまったく受け入れられなくしている。その運動の自己主張は無視され、あるいは議論されるであろう。もしもその運動が、西欧諸国において誠実な宗教であると認められたすべての団体に与えられている特別慈善団体という法的地位を得ようとしているならば、このことはかなり重大であろう。一般大衆、報道機関、政治家たちは、宗教がどのような外観を持つべきかというイメージをすでに持ってお

り、近代化された組織構造は、そうした安易なイメージとは一致しない。結果として、新宗教は実は本当の宗教ではなく、むしろ、だまされやすい信者たちから金を搾り取るため、また虚偽によって慈善団体としての法的地位を主張することで国家を欺こうとするための、何らかの念入りに計画された操作的な陰謀であると、反対者が示唆するのにまったく好都合なのである。

一般民衆における敵意、反カルト・プロパガンダ、政治的な疑念、そしてメディアによるセンセーショナリズムの結果として、すべての宗教が法の下では平等であるという法的な判決にもかかわらず、また、信教の自由に関する国際的な宣言にもかかわらず、新宗教は非常にさまざまな形での差別を受けていると思われる。最悪の場合、政府は新宗教による特定の活動を禁止し、あるいは査察と制限下に置こうと考えている。こうして、イギリスのように、一般的には自由な国においてさえ、(サイエントロジーの創始者ロン・ハバート、また別の時には統一教会の尊師である文鮮明などの)特定の宗教的指導者たちの入国が拒否されるという時期があり、サイエントロジー教会の一般信者たちも入国を拒否されてきた。より厳しい対処は警察による行為である、一九九〇年から九三年にかけて、フランス、スペイン、オーストラリア、アルゼンチンでは、愛の家族(前身は「神の子供たち」)の共同体に対して未明における大規模な立ち入り捜査とメンバーの子供たちの強制的な保護監禁が行われた。それらのすべての事件で、警察の行為を正当化するような(主張された幼児虐待の)証拠は提出されなかった。異なる国々で行なわれた、基本的に似通った嫌疑と警察の対応にみられる同時性を考えるならば、これらの事件は特定の新宗教に対する大がかりな作戦ではないかという何らかの国際的な共同謀議の疑惑を生じさせるものである。

これらのエピソードはきわめてドラマティックではあるが、差別というものの多くはもっと巧妙な形で行われていることを忘れるべきではない。シンガポールでは、エホヴァの証人によって発行された聖書を所有していることすら懲役刑に値する犯罪となっている。宗教登録と警察による監視の要求が、フランス、ベルギー両国の議会報告において取り上げられ、その多くが自由に運営されている。

れ、他の国々において何の問題も起こしていない(創価学会インタナショナルを含む)きわめて様々な宗教を含むブラック・リストが作成されている。ドイツではサイエントロジー教会への広く行き渡った差別が、実際に裁判事件となっている。出演者の中にサイエントロジーのメンバーがいたことを理由に、ある映画上映のボイコット運動になったからである。サイエントロジーのメンバーは雇用を拒否されているし、政党のメンバーとなるための被選挙権も宗教的な忠誠という理由だけで否定されてきたのである。

公式の敵意、反カルト運動の活動、背教者たちの影響などを考慮に入れるならば、多くの国々で、新宗教がしばしば何らかの訴訟事件に巻き込まれてきたことは驚くにはあたらない。事件の数は、とりわけ合衆国において、ここで触れるにはあまりにも多すぎるし、結果も一様ではないが、新宗教が直面する珍しくない問題として、新宗教は裁判所に理解できる言葉で自分たちの意見を述べることが困難であったことがあげられる。まったく相容れない仮定、概念、そして用語が、裁判所と宗教的組織という二つの制度的な文脈において使用され、宗教的な訴訟事件では、しばしば十分な意見が呈示されてこなかった。こうした困難を部分的に解消するために、これまでの裁判において問題となってきた自分たちの信念、実践、ライフ・スタイルがどんなものであるかを述べる場合に、新宗教は専門的な訓練をうけた証人の証言にますます依存するようになってきている。裁判所の方でも、宗教家自身の直接的な評価が受け入れ難いことがしばしばあり、またあまり受け入れようとも思っていないので、係争中である特定の運動を研究し、恐らくはその中で住み込み調査をしたことさえある学術研究者たち——特に社会学者たち——の証言を一般的に受け入れるようになってきている。慈善団体としての法的な地位やメディア放送を通して宣伝活動するためのアクセス権を求めたりといったことから、子供が監禁されているとして、信者である親とそうでない配偶者間で争われている訴訟問題までの、焦点となっている非常に多くの事柄への関心を表現するため、中立的で、客観的で、距離を置いた学術研究者たちに新宗教はますます依存するように

なってきている。こうした状況は、共感的客観視(sympathetic detachment)という根本規範を信奉する社会学者による客観的な調査を受け入れ、さらには奨励さえすべきであると、新宗教がますます考えるようになっている理由を説明するものである。

七　結びにかえて
―新宗教の内的な問題

以上述べてきた事柄は、より広い社会において広く行き渡っている新宗教に対する敵意と差別の源泉であり、疑いもなく新宗教が直面している困難の主要な源泉である。しかし、新宗教が直面しているのはこれらの問題だけではない。対外関係において発生した外部との緊張に加えて、その発展に伴い、解決しなければならない純粋に内的な種々の問題に新宗教は直面するであろう。短期的に見るならば、まだあまり切迫したものではないであろうが、その運動が成熟するにつれて、これらの問題は注意を必要とする。そうした問題は、次のように素描することができるだろう。

第一に、すべての成功した新宗教運動は、制度化が進むという可能性に直面している。自発的な熱狂から始まったものは、日常化した服従へと落ち着いてしまう傾向がある。運動が成長するに従い、きわめて標準化された制度が必要となり、官僚的な傾向が発展するであろう。その運動を運営するために、ある意味で職業的な階級の成長を避けることは難しく、それゆえ、問題となるのは、この階級と一般的な平信徒との感覚や期待のズレであろう。もしもこうした運営者たちが、地位を守ることを正当化するために何らかのタイプの聖職者的な地位を主張するならば、聖職者と平信徒との間の古典的な緊張と分離は決裂にいたるであろう。そうした主張をしなかったとしても、それでもなお、自分たちが一般信徒には触れることの許されていない優越的な地位にあることを運営者たちは思い起こす必要があるであろう。

第二に、財産や不動産の獲得によって、非常に多くの場合、布教することよりも組織を維持することに関心をはらうような法手続き上また運営上の専門家を必要とするようになる。目的の転移(goal displacement)と社会学

者が呼ぶように、専従職員たちは組織上の価値や利益に最優先の関心を払う傾向があり、しばしば、信仰上の主要な価値や宗教的な専心が損なわれることもある。

第三に、信仰上の中心的な教義と結びついてはいるが、直接教義から導き出されたものではないような、いくつかの副次的な問題関心をその運動が含んでいる場合にも、同様の問題が発生するであろう。そのような副次的な関心がますます重要になると、信仰それ自体よりも、この副次的な活動計画により専心する者たちをその運動へ惹きつけるであろう。恐らくそれは、平和主義的な活動計画に対する熱狂的な支持において、クェーカー教徒たちが(戦時中に)経験したようなことである。宗教的福音主義というその運動の主要な関心に沿った社会福祉活動を始めたときに、救世軍もこの危険にあったが、可能性の段階で明らかに持ちこたえた。我々は、ある運動が主要な目的が副次的な目的によって攪乱される場合(極端な例では、運動自体が壊滅するおそれもある)、そして運動のエネルギーや資源が主要のものから、もっと特殊で、二次的なものへ転換されるような場合、それを目標の逸脱(goal deflection)の一形態であると呼ぶことができるであろう。

第四に、第二(そして後続の)世代の社会化に関連した不可避的な一連の問題がある。第一世代である親たちは、それまでの信仰とそれに関連するものを放棄するために、必死に戦って新しい信仰を獲得した。親の世代が勝ち得たものは、彼らの子供たちにとっては、親から受け渡された正統的な信仰を受け入れるかどうかという問題に変わっている。最初の改宗者たちは、ある意味で、革新者であり、開拓者であり、恐らくは反抗者でさえあるのに対し、後続世代は自分たちの信仰のためにそれほどの苦労は必要なく、結果として、信仰を当たり前のものとみなし、年長者たちと同じような深い感謝の念もなしに、軽々しく扱うであろう。こうしたプロセスを我々はコミットメントの低下と呼ぶことができる。

第五に、時代を経ることによって、その運動が本来もっていた存在理由が十分に理解されなくなるであろう。それをめぐって争い、あるいはそれについて反抗し、そこから新宗教が発展してきたところの、新宗教と古い信

仰との違いがあまり主張されなくなるであろう。新しい世代は、違いをもたらした根拠をあまりよく理解しなくなるであろうし、さらにはそれらを「時代遅れのもの」とみなすようになる。したがって、最初は小さな事から、続いてより重要な問題について、より古い確立された信仰存在理由を同じくしてしまう傾向を持つであろう。特有の価値を主張するのをあきらめることや無分別に良心的であることは、新宗教の特有の使命感を徐々に骨抜きにしてゆき、やがては他の一般化された宗教的信仰の表現の単なるひとつとして自らを位置付けるようになってしまうであろう。

しかし当面の間、人間の組織のあらゆる形態において発生するこれらの内的な緊張によってよりも、より広い社会に彼らが受け入れられることの困難さによって、新宗教は包囲され攻撃されるであろうと思われる。それこそがここで考えてきた事柄であり、本稿は、主にそして細部に渡って、世界中の新宗教にとってほとんど共通の経験となってきた外的な問題に焦点をあててきたのである。

注

(1) Norman H. Murdoch, *Origins of the Salvation Army*, Knoxville: University of Tennessee Press, 1994, p. 120.

(2) M.James Penton, *Apocalypse Delayed*, Toronto: University of Toronto Press, 1985, p.77. 一次資料のいくつかのものは Raymond Franz による *Crisis of Conscience*, Atlanta: Commentary Press, 2nd Edn., 1992, pp. 11-13ff. の中にみることができる。

(3) この問題に関する議論は James T. Richardson, "A Social Psychological Critique of "Brainwashing" Claims about Recruitment to New Religions" in David G. Bromley and Jeffrey K. Hadden (Eds.), *Religion and the Social Oreder: The Handbook on Cults and Sects in America*, vol.3 (Part B) Greenwich, Connecticut: JAI Press, 1993, pp.75-98. を参照。

(4) ウェコ事件におけるFBIの果たした役割を扱った一連の論文として Stuart A. Wright (Ed.), *Armaggeddon in Weco*, Chicago: University of Chicago Press, 1995刊. を参照。

(5) James Beckford, *Cult Controversies: The Societal Response to New Religious Movements*, London: Tavistock, 1985, p.235.

(6) Assemblée Nationale: Commission d'enquête. Rapport n° 2468 *Les sectes en France*, 1996. より詳細な批判については、Massimo Introvigne and J. Gordon Melton (Eds.), *Pour en finir avec les sectes: Le débat sur le rapport de la commission parlementaire*, Paris and Milan: CESNUR and Di Giovanni, 1996. を参照。

(7) Bryan Wilson, *The Social Dimensions of Sectarianism*, Oxford: Clarendon Press, 1990, p.19.

(8) A.D. Shupe, jun., and D.G. Bromley, "Apostates and Atrocity Stories", in B. Wilson (Ed.), *The Social Impact of New Religious Movements*, New York: Rose of Sharon Press, 1981, pp. 179-215.

(ブライアン・R・ウィルソン／オックスフォード大学名誉教授)
(訳・あわづ けんた／創価大学大学院博士課程)

(本稿は一九九七年十一月二十五日に行われた当研究所主催の東哲セミナーでの講演原稿に加筆したものです)